

GOD EATER3 ジ・エンド ド・オブ・エタニティ

レインメーカー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

保存日時：2017年03月15日（水） 03:49

2078年 イギリス支部

人類に天敵が現れて28年、その脅威は依然として世界を喰らっていた。

人間を始め、建造物や無機物、核をも喰らう謎の生物“アラガミ”によって世界は神の食べ残しとなってしまった。

ゴッドイーターはもちろんのこと、それらに対抗する為、イギリス支部では次世代型対アラガミ兵器“ヘラクレス部隊”の開発、実戦投入に成功していた：

しかしそれは、隠された計画の中で偶然できた代物に過ぎなかった。

新たな敵、新たな仲間、新たな舞台。

彼らの終わることのない戦いがそこにあつた。

—————

初投稿です。

極東支部のキャラが好きの人には申し訳ありませんが、極東のメンバーはあんまり出てきません。

舞台はイギリス支部、全く新しいゴツドイーターを味わって頂けたらな、と思います。

※ストーリーやキャラクターはオリジナルです

※時系列では2RBの後で、イギリスが舞台です

※神機、アラガミなどは一部改変・オリジナルがあります

※誤字脱字とか多いかもです

目次

第1話	イギリス支部	1
第2話	憩いの時間	7
第3話	空の脅威	16
第4話	ヘラクレス部隊	25
第5話	討伐者	32

第1話 イギリス支部

―旧市街地戦闘区域（夕）―

「こちらヴァンガード1、ターゲットと接敵した」

一人の神機使いが無線で伝える。

彼はイギリス支部で最も功績の高いベテラン神機使い、サミュエル・ロツクウエル少尉だ。

夕日が地平線に沈もうとしている今、彼の眼の前には、ヴァジュラが荒々しい息をしながら対峙する。

しかし、ヴァジュラは目の前の敵を睨むばかりで動こうとしない。

「了解。作戦通り、ポイントへ陽動しろ」

司令部から女の声が無線に入る。

彼とヴァジュラは、向き合ったままピクリとも動かない。風が砂を巻き上げながら、彼らに吹き付ける。風が止み、少しの間静寂が訪れる。

「……」

彼は身構える。戦うためでは無く、逃げる為に。

神機を握った手に力を込めて、思い通りに扱えるように敵の攻撃に備える。

「ヴァアアアアアア!!」

ヴァジュラが猛々しい唸り声をあげながら長い沈黙を破った。その咆哮は、市街地中に雷鳴の如く鳴り響く。

ヴァジュラは、鋭利な右爪をサミュエルに振り上げ、直後に一閃する。

サミュエルは一瞬で神機の装甲を展開し、アラガミの巨大な力を盾で受け止め、大きく後退してしまう。

だがその勢いは殺さず、空中ですぐさま真後ろに身体を向け、吹き飛ばされた勢いを利用し加速、そして全速力で走り出す。

ゴッドイーター：…そしてその内のエース級である彼には焦りや不安の表情は無い。

その適合率2・9倍の身体能力から叩き出される速度は、一般神機使いですら追い付けない。

サミュエルは耳にはめている無線機を指で当てながら、陽動ポイントにいる戦隊長レノックス曹長へ無線を繋ぐ。

「レノックス、もうすぐそっちへ着く!」

レノックス曹長は「待ってるぜ」と返事をし、そして彼自身がまとめる部隊に目をやり、声を張り上げ命令する。

「いいか!!敵が見えても発砲するな!!サミュエル少尉が離脱してからだ!!」

レノックス曹長は、開けた廃公園に部隊を大きな扇状にして配置している。しかし、彼が持つ部隊とは、ゴッドイーターではない。

通称“ヘラクレス部隊”。

対アラガミの次世代対抗兵器として開発された戦闘部隊である。戦車、歩兵、装甲車……かつてはアラガミに対抗できた既存の兵器に大幅な改良を加え、尚且つ弾に特殊な機構を用いて、アラガミに対抗する。

イギリス支部兵器開発局が開発に成功し、神機の発明以降、二度目の人類の快挙とも評されている。

彼らは過去に何度もアラガミを撃退しており、新たな“アラガミ狩りの兵隊”なのだ。

ヘラクレス部隊員達に大きな足音が聞こえ始めた頃、司令部から無線がサミュエルに入る。

「指定ポイントに入ったのち、すぐに離脱しろ。さもなければ、銃弾と砲弾の雨だぞ」

彼の後ろにはヴァジュラがその巨大な体躯で地面を抉りながら、猛スピードで追いかけて来ている。

「化け物との追いかけっこは苦手なんでね。今すぐにも離脱したいさー!」

サミュエルはヴァジユラとの距離を一定間隔を保ちながら、接敵した場所より大きく離れていた。

「あそこだな……」

サミュエルの眼先には大きく開けた場所がある。倒壊したビルの隙間や廃れた住宅街の細い道から、一気に広い廃公園へと勢い良く出る。

それと同時に、神機使いが得意とするステップを使って曲がり角で急な方向転換をして、ヴァジユラの視界からサミュエルは消えた。

しかしヴァジユラの勢いは止まらず、ドリフトをするように土煙をあげて滑りながら急旋回する。

「撃て」

刹那、戦車から指揮するレノックス曹長の一言で、旧市街地の静寂さと部隊の沈黙が一気に消え去る。

無数の銃弾、多数の戦車から砲弾が撃ち出された。

着弾と同時に爆発を起こし、黒い煙がヴァジユラを包み込んだ。

あれだけ地面を揺らしながら駆っていたが、黒煙の中からヴァジユラの姿は出てこない。

発砲命令から5秒もしない内にレノックス曹長は、撃ち方やめの合図を出す。

轟音が旧市街地の複雑な廃ビルに反射して、まだ遠くで鳴り響いている。少ししてから司令部から無線が入る。

「ご苦労、ヴァジュラのオラクル反応は消滅した。作戦成功だ」

レノックス曹長が戦車から降りて部隊に帰投準備にかかれ、と命令する。彼が向かったのはサミュエル少尉の所だった。

「ご苦労だったなサム、陽動だけとは申し訳ないな」

「気にするな、俺たちゴッドイーターも戦うより逃げる方が死なないしな」

「なあに、強敵が現れようがお前くらいのエースは死なないさ」

冗談交じりにレノックスが笑う。

「馬鹿言え、俺だって転けて怪我もするし血も出る」

サミュエルも笑う。

そして、2人は軽く握った拳と拳をぶつける。戦闘後、お互いが生き残った時にやる、昔からの2人の風習だ。

ふと、ヴァジュラに目をやったサミュエルは何かを思い出した。

「おっと、捕喰するのを忘れるとこだった」

サミュエルは神機を肩に担ぎ、ヴァジュラの亡骸の元へ歩き始める。

「曹長！ 帰投準備整いました！」

一人のヘラクレス隊員がレノックス曹長の元へ駆け寄る。

「ああ、わかった。サミュエルが捕喰を終わったら帰投する」

隊員はレノックス曹長がヴァジユラを喰らおうとするサミュエルの姿を凝視しているのがわかった。荒れ果てた市街地を照らす夕日の陽光がサミュエルとその神機のシルエットを浮かばせる。

神機から裂けた大口が生え、ヴァジユラの肉をグチャ：クチャ：と喰らう。

血飛沫が吹き、強固な肉を噛み千切る。しばらく咀嚼した後、神機のコアが光った。

「まあ、悪くない戦果だ」

サミュエルは呟いて、帰投準備が整った車列に向かい、レノックスが乗る戦車に同乗する。

「よし、足りない奴は居ないな！出発だ」

10輻の装甲車と戦車がエンジンを吹かせ、一列縦隊でアナグラを目指し始めた。

ヴァジユラの死体は各所から黒いオラクル細胞が霧散していく。しかし、それはやがて別の所で再結集して再びアラガミが形成される。

命を賭けて殺しても、いずれ蘇る…そんな終わりの無い戦いに彼らは身を投じていた。

第2話 憩いの時間

ーメインフロア ラウンジー

フェンリルイギリス支部、メインフロア：ゴッドイーターを始め整備係、オペレーター、研究者、ナースや清掃員まで様々に人が行き交う場所。

メインフロアは広い範囲で様々な施設がある。

階段を上った二階と一階は吹き抜けとなつて、一階にはターミナルが並び、そしてミッシヨンの受注やアウンスをするフロントがある。

また出撃ゲート、神機保管庫、支部内居住区、作戦司令部、戦車や装甲車が並ぶ倉庫へと繋がる。

二階では転落防止用の柵に持たれながら、一階の大勢の人間の繁忙な様子を眺める人も少なく無い。主にラウンジーや、消費アイテムは携行品、雑多や本などの商業施設が二階に並ぶ。昼間は多くの人が行き交い、民間人の立ち入りも許可されているが午後21時の今は、数人がいるばかりで閑散としていた。

『ヘラクレス部隊に、新たな戦果です。今日の夕方頃、旧オックスフォード市街地にてヴァジュラと交戦。損害は皆無で圧倒的勝利を飾りました。また、ヘラクレス部隊が大

型アラガミを討伐したのは今回で37回目ということですよ」

アナグラのラウンジにある大型のテレビモニターから、ニュースキャスターが報道をしている。

外部居住区でも放送される民間放送だ。画面には『ヘラクレス部隊 完勝』というテロップもある。それだけヘラクレス部隊の活躍は注目の的なのだ。

「勝つ度に報道してんのか、これ。もう50回は聴いたような気はするぞ、なあ?」

ニュースで件の作戦に参加したサミュエル・ロックウエル少尉は缶ビールを片手にソファに座っていた。その横には金髪のポニーテールの女性が座って爪を切ったり磨いたりしている。

女性の名はシルヴィア・ウィンズレット、イギリス支部第一戦隊“ヴァンガード隊”の副隊長を務めている女だ。

「新たな戦力だから注目されるのは当然ですよ。それより、今日のミッションも陽動係だったんですか?」

シルヴィアは爪を磨きながら問う。

「ああ、お陰様で追いかけてこも楽しくなってきたかもな」

ハツハツハと大袈裟に笑うサミュエルを横目にシルヴィアは表情を変えずに話す。

「ヘラクレス部隊が実戦投入されてから出撃がめつきり少なくなりましたね、世間では

”ゴッドイーター不要論 さえ出てるそうです”

「ゴッドイーター不要論ねえ…まあ、俺としちゃ、戦わなくて済むなら日が来るならそれはそれで良いんだがな」

「ヘラクレス部隊は確かに革新的で新戦力なのは確かなのですが…そろそろだと思いうです」

シルヴィアもゴッドイーターである。ゴッドイーターは、敵が何であるのかを知っている。彼らの敵は”常に進化をする”敵であることを。

「ヘラクレス部隊が無力化されるのも時間の問題かと」

爪を手入れする横顔を見ても憂う表情が伺える。

サミュエルの内心で思ってた事を彼女もそれと同じ事を感じていた。ゴッドイーターであるが故に、敵に最も近く、敵を最も知らなければいけない立場である二人は、ヘラクレス部隊がいつまでも対アラガミ兵器として使える事は無いと思っていた。

「まあ、俺達は討伐命令が来れば出撃するだけさ。ヘラクレス部隊には今の内に働いてもらわなくちやな」

サミュエルはテーブルに置いてある、スライスされたじゃがバターを一枚口へと運ぶ。

シルヴィアは、咀嚼するサミュエルを不思議そうな表情で見つめる。

「それ、あんまり美味しく無いですよね」

「バターが不味いがじやがいもで相殺されて妙な味だな……だが、このご時世食えるだけでありがたいんだぞ?」

サミュエルは、フォークに取った一枚のじやがバターをシルヴィアの方へやる。

「食うか?」

シルヴィアは要りません、と拒絶した。

あつ、と言つて何かを思い出した様に咄嗟に腕時計を見たシルヴィアは席をおもむろに立ち上がる。

「お肌が悪いのでそろそろ寝ますね。隊長もビールばかり飲まないでください。私の方も取つてもう3本目でしょう? 二日酔いだど戦闘に支障をきたしますので」

シルヴィアは返事を待たずして、ラウンジを立ち去ろうとした。だが、また何かを思い出したように、サミュエルの方を振り返る。

「あ、あと明日は補充の新人が来ますから。面会は昼食後だったかな。休暇だからって昼間まで寝るのはやめてくださいね、もう起こしに行くのは嫌ですから。そもそも隊長起こしても起きないし」

そう言つてシルヴィアはサミュエルの元を去る。

愚痴にも似たシルヴィアの言葉が突き刺さり、サミュエルは返す言葉も出なかった。

サミュエルは溜息をついてビールを勢いよく飲み干す。

『…とのことです。続いて、新種のアラガミについての報道ですー』

ニュース番組から聴こえてきたワードに思わず反応し、サミュエルはモニターを見上げる。

『昨日の深夜3時頃、博物館廃墟で新たなアラガミが目撃されました。設置された暗視カメラに映つたのはボルグ・カムラン種ですが、各所に原種との差異が見られます。専門家の映像分析によりますと、片方の盾は変形しており、もう片方は刀や槍に変異している、とのことでした。』

真つ暗の廃墟で暗視カメラに不気味に白く映る新種の映像が流れる。

ズームした映像だからか、画質が悪く見えにくいですが確かにボルグ・カムランの特徴的な風貌をしていた。5秒程の映像あったが、サミュエルはしっかりと脳に焼き付けた。

これから、近い内に戦うであろう敵であるからだ。

ー展望室ー

外部居住区やその奥にある防壁を見渡せる展望室。

節電の為に外部居住区に灯してある光は弱く、空には満天の星空と満月が浮かんでいた。

その景色は、心を洗われるらしく、カップルや撮影に来る人などがそこを利用する。

また、聴こえる音は時計の針と足音くらいのも静寂さで落ち着きを求める人なども、戦闘後はここでビールを飲む人だっているそうだ。

しかし今日は違った。展望室に来ていた数十人の人間が、一箇所を囲っている。

その中に三人の男がいた、内一人は大の字になって床に倒れ、そのすぐそばで二人は腕ひしぎ十字固めで固められている人がいた。

「参ったか？ゴッドイーターはあんたらみたいなただの人間じゃねえんだよ」

十字固めをしているオールバックの男が言う。

「わかっ……た……離せ……」

固められている男が空いている手でオールバックの男の足を叩く。参った、参った、と。

「功績上げてきたからって調子に乗ってんじゃねえぞ、いつそこの腕折っちゃまうか？」

周りに野次馬が出来ているが、男は気にしない。

すると、野次馬の間を縫うようにレノックスが割り込んできた。野次馬の中で起こっていたものを見たレノックスはすぐに近寄り、固めを解こうとする。

「おい何の騒ぎだ！離れろローレンツ！」

オールバックの男……ローレンツ・カルゼンブルーッカーはそう言われても固めた足を解こうとしない。

「レノックス…あなたの部下はどうなってるんだ？人を噛む犬にはぐつわを付けてなきやダメだろ…」

「何があったかはわからんが、兎に角離れる！」

半ば力押しでそのローレンツの固めを解く。

「良かったな、クソ野郎。飼い主が助けに来てくれたぞ」

そう言うのとローレンツは自ら固めた脚を解き、立ち上がった。固められていたレノックスの部下は、絡んでいた腕を肩を回して正常かどうか確かめる。

レノックスは近くに倒れているもう一人の部下の方へ行き、脈があるかどうかを確かめる。

ただの気絶だと確認すると、立ち上がったローレンツの方へ目をやる。

「ローレンツ、何があったんだ」

「あなたの部下が俺のいる前で愚痴を言ってたのでな。」ゴツドイーターは働かない癖に金は俺達より貰う”ってな、だから噛む犬には躰が必要だろ？」

「そうか…すまない。部下にはちゃんとやっておく」

「ヴァジュラやクアドリガ倒せて調子乗るのはいいが、勝手にゴツドイーターより上だとは思わないよ。お前らは下っ端だ」

ローレンツの言葉を聞きながら、レノックスは部下を背負って立ち上がる。

「俺は、いつも神機使いには敬意を払え、と言ってるんだがな…。すまなかつた」

レノックスはそう言い、散り散りになった野次馬の隙間を通ってエレベーターへ向かった。

「まったく…新戦力新戦力つつつてもガンナーよりも遠距離から弾撃ってるだけのチキン野郎達じゃねえか」

ローレンツは独り言を周りに聴こえるように、わざと大きめに言ったが、終わった喧嘩沙汰に野次馬は殆ど無くなっていた。

「…またか…お前」

背後で呟くその声にローレンツは肩をビクつとさせた。それは声で驚いたからでは無く、その声の主に。

ローレンツには、その冷たい声が誰の声か一瞬でわかる。

「…女王様…かよ」

ローレンツは、振り返る間もなく首を掴まれあつけなく女王様とやらに連れて行かれる。

ゾーラ・スチュワート、イギリス支部作戦司令部司令官の女。また、ゴッドイーター、ヘラクレス部隊を管轄する。その、淡白な性格と厳格な性格が畏怖され、“女王様”と恐れられる。

元ゴッドイーターである彼女の力は、さっきの男達とは明らかに天と地の差があった。

その女に首を掴まれ、抵抗も出来ず、力のままエレベーターへと押し込まれる。

ゾーラは、エレベーターのボタンを押す。

「そろそろ懲罰が必要か？」

そして、明らかに怒っている眼でローレンツを睨みつける。

「ゾーラさん、だってヘラクレスの奴らが……」

激昂している女王様を前にローレンツは、話す言葉を全て話せず途中で詰まる。

しばらくエレベーターの中に静寂が訪れた。

それは、無口な彼女と、怖気づいたローレンツの沈黙が重なった結果だった。

エレベーターが目的階に着いたことを知らせる。

扉が開き、

「来い」

ゾーラのその一言でローレンツは、後悔するのであった。

第3話 空の脅威

ーヨーロッパ大陸 上空（朝）ー

「ねえ！緊張してるの？」

ヘリの中だと言うのに彼女の声は無線無しでも聴き取れるくらいに大きい。

軍用ヘリの中、荷物や人を乗せる後部スペースで、彼女は神機を片手に開いたドアから外に身を乗り出して周囲の警戒をしている。

彼女は、ルチア・ジュランナー。イギリス支部から派遣されたゴツドイーターだ。肩まである短い赤髪を風で揺らしながら、壁にもたれかかっている男に話しかける。

「いや、緊張してない」

新人ゴツドイーター、ジェレミー・ウオーカーは壁にもたれかかったまま答える。さも、自分は落ち着いている、というかのように虚勢を張る。

横にある解放されたドアから心地のいい風が身体に当たる。

そこから身体を捻って外の景色を見てみるが相変わらず砂で茶色く、所々に倒壊したビルや廃墟が埋もれているのが見えるだけだ。

緊張する気持ちを落ち着かせる為に外を眺めていたが、ただただ流れていくだけの大

して変わらない風景ばかりで楽しめもしない。

「外、つまらないね。砂漠ばっかじゃん」

ジェレミーは、内心を覗かれてるような気がして少しドキツとした。

「ねー、話相手になつてよ。外にアラガミなんていないしさー」

ルチアはヘリの神機を床に置いて哨戒をやめる。

「ちよつと、ここで戦えるのはルチアしかいないんだから真面目にやってくれよ」

「うるさいなあ。こつちの任務はあんたをイギリス支部に連れて行くことなの。アラガ

ミの討伐が任務じゃ無いし。そもそも戦うアラガミがいないじゃん」

ルチアもジェレミーと同じように壁に背中を預けて座り込む。

「それに、上空にアラガミが出現したら管制塔が知らせてくれるし。目視なんてやる意味ないじゃない」

新人であるジェレミーは、ゴッドイーターがこんなに緩い意識なのかと内心驚く。そしていつの間にか緊張も無くなっていた。

ヘリに乗り合わせる前から仲が良くなったルチアと話したからだろう、と自問自答する。

「それにしても支部長直々の命令とは珍しいなあ」

「何が？」

「支部長がドイツ支部から貴方を連れて来いって命令。何？あんた凄いな？新人なのに？」

「いや…知らないよ。俺も今の神機よりも適合する神機がイギリス支部で見つかった、って言われたから付いて来たんだが」

「あーでも、一ヶ月前に神機使いが亡くなっちゃったからかなあ？その埋め合わせかも」
やはりそういう運命のゴッドイーターも少なく無いのか、とジエレミーはこれからを憂う。

「その人の神機を使うのか？」

ルチアはさあね、とだけ言って欠伸をする。

暫く会話が途切れ、風が通り過ぎる音とヘリのブレードが空気を切り裂く音が鳴り響く。

外を見てみると、下はもう砂漠では無く青い海だった。

ヘリはドーバー海峡に差し掛かっていた。

「イギリスって…襲撃少ないんだっけ？」

「んー、最近はそうでも無いよ。少し増えたくらいかなあ？」

「確かヘラクレス部隊？とか言ってたっけ。次世代の兵器とかなんとか…。ドイツ支部でも格好報道されてたんだけど」

「そんなにも有名なの!? まあヴァジュラとか普通に倒せるしあんたと同じくらいじゃない?」

ジェレミーは、皮肉なのかどうかも分からず話を続ける。

「ドイツ支部の人達も言ってたよ、ヘラクレス部隊の技術が欲しいってね。それとインド支部や極東支部なんかも」

「ヘラクレス部隊大人気じゃん、やばいね。でもさ、逆にヴァジュラ一体にアレだけの人数が必要だとねえ」

ジェレミーが会話を続けようとしたが、操縦席の方から聞き慣れないアラートが鳴り始める。二人はそれが何かの警告音なのがすぐにわかった。

直後に無線に通信が入る。イギリス支部の航空管制塔からだ。

《ロンドン近郊から対空ミサイルの発射を確認した。発射源はクアドリガ種だ。方向と高度からして目標は当機だ》

ミサイルアラートは鳴り止まない。ルチアは無線が続いてる間に神機を銃身に切り替え、命綱のフックを手摺にロックする。

《迎撃ミサイルの発射は間に合わない。当機に乗っている神機使いに迎撃させるか、回避機動をとってくれ》

操縦士はルチアが既に迎撃の準備をしているのを確認する。

「こつちはいつでもオーケー！ミサイルが来てる方角と距離、推定着弾時刻を教えてください！操縦席、調整よろしく！」

ルチアは耳の無線機を押しながら、相変わらず大きな声で話す。

操縦士は親指を立てて了解の合図をする。

《方角、当機から3—2—0、距離約40マイル、着弾は43秒後だ。同高度の為、調整は不要》

操縦士はへりをルチアが迎撃しやすいように向きを調整する。

ジェレミーは揺れる機体の中で手摺を掴んで、ミサイルを待つルチアを見る。

目が合ったルチアは戦えない新人に声をかける。

「うわっ不安で今でも泣きそうな顔してんじゃん！」

こんな状況にも関わらずゲラゲラと笑うルチアを見てジェレミーは不安よりも逆に頼もしさを感じた。

「うちの銃身はガトリングだから、精密射撃は苦手なんだよねえ」

「大丈夫かよ……」

「まあ、見てなって！ドーにかなるよ！」

「……」

ルチアは銃身を構え、ミサイルが見えるのを待つ。

背中に施されているフェンリルマークが異様に頼もしく見える。

ジェレミーは神機が無いだけとは言え戦えない自分に歯がゆさを覚えた。

《着弾まで20秒だ》

管制塔からの無線が入る。ジェレミーがルチアの奥を覗くと遠くでミサイルのジェット噴射が光っているのと、白煙が通り道を作っているのに気がつく。

「おい！なんで撃たないんだよ！」

邪魔をしてはいけないとわかっていながら、あまりの不安に声をかけてしまう。

当然、ルチアは

「うるさい！黙ってて！」

とジェレミーをすぐに黙らせた。

ルチアは静かに目視でミサイルとの距離を算出する。

…3

ルチアとジェレミーから見たミサイルは、真正面で小さく丸い的にしか見えない。

…2

ルチアは静かにミサイルが射程内に入るのをジッと待つ。ジェレミーはそれを黙って見るしか無かった。

…1

ルチアがトリガーを引く。ヴウウウ…と音を立てながらガトリングの銃身がゆっくり回り始め加速し、それはすぐに次々と火を吹いた。

ドドドドドド…とオラクル弾が発射される。

次々と放たれる射撃の反動で暴れる銃身をルチアは抑え込む。それと同時に徐々に大きくなる的に狙いを定めながら。

ジエレミーは、瞬きもせずそれを眺めていた。

確かに数発は当たっているが、ミサイルはものともせずへりめがけて直進してくる。ルチアは尚も、撃ち続ける。

ミサイルが近づくと連れて、当たる弾丸の数が増えていく。

《着弾まであと10秒だ！何をやっている！》

「うん…やい、こー」

ルチアの声はガトリングの音でかき消され、ジエレミーには聴こえない。

そして、それから3秒間ほど、ルチアが放つ弾丸は連続で当たり、ミサイルは激しい爆発を起こした。

その衝撃波がへりに伝わり、機体が大きく揺れる。ルチアも爆風で思わずよろけてしまい、手摺にしがみつく。

ミサイルの迎撃に成功した直後から、操縦席からさつきとは別のアラートが鳴り始め

ていた。

「ふう…なんとかしてみせたよ…けど、これヤバイかも?」

ルチアはミサイルの脅威が去った今でもアラートが鳴り止まない事に気が付き、外に身を乗り出しヘリの後ろを見る。

「あちゃー…テールローターがやられたみたい、多分破片かな?」

ヘリのテールローターから黒煙が吹いてる事にジェレミーも気が付く。

だが依然としてヘリは安定していた。

「テールローターが損傷した。飛行は続けられるがいつ被害が拡大するかわからん。兎に角、急いでイギリス支部へ向かう」

操縦士が二人に言う。それと同時に、管制塔から通信が入る。

《ミサイルは消失。ご苦労だった。発射源であるクアドリガはヘラクレス部隊が交戦を開始した。対空ミサイルはもう大丈夫だろう》

ジェレミーは、緊張なのか恐怖なのかわからない感情が解かれ、大きく息を吐いた。

「あんた、ビビりすぎー。そんなんじやアラガミの前でチビるんじやない?」

ルチアは緊張していた素振りを一切見せなかった。

「はいはい…」

どつと疲れが肩にのし掛かって返事する気力は出なかった。

ゴツドイーターを乗せたへりは、尻尾から黒煙を吐きながらイギリスを目指す。

第4話 ヘラクレス部隊

ーイギリス支部近郊 旧市街地（朝）ー

朝日が市街地を鋭く照らす。

今日も市街地には、アラガミが出没している。ヘラクレス部隊にはその討伐命令が下った。

《ヘラクレス1スタンバイ》

《ヘラクレス2から4スタンバイ》

《ヘラクレス5から6スタンバイ》

6輻の戦車が廃れた街中に生えた茂みに身を潜める。砲口のみを茂みから出して、6門の巨大な砲の100メートル先にクアドリガがその巨大な体躯を軋ませながら、廃車を砕き、木を薙ぎ倒し、地上を闊歩している。

クアドリガは戦車に気が付かず、ヘラクレス部隊に後ろ姿を曝け出している。

《時間がない。これだけは伝えておく》

うち1輻に乗るレノックス曹長が全車輻へ通達する。

《最優先はミサイルポッドだ。次に胸殻。最初の斉射が終わったらすぐに装填し、す

ぐに撃て。反撃する暇さえ与えるな》

全車輛が了解の返事をする。

クアドリガは狙われている事も知らず、新しい車を見つけて酷い音を立てて食べている。

《ヘラクレス1から3は右のミサイルポッドを狙え。ヘラクレス4から6は左のミサイルポッドだ、砕き落としてやれ》

そう言うのと、各車輛は各々の目標に照準を定める。

レノックスの指示通り、ミサイルポッドを砕く為に。

嵐の前の静けさが訪れる。

茂みは風に揺れ、葉と葉が擦れる音と、鳥の鳴き声、そしてクアドリガの鉄を砕く咀嚼音があるのみ。

レノックスは一呼吸置いて、撃て、と言う。

刹那、タタタンツ！と言う耳に響く発射音が重なる。相変わらず発射音はビルや廃墟で遠くまでこだまする。

穏やかな朝の風に揺れていた茂みの葉っぱが爆風で散り、周辺にいた鳥達が一斉に飛び去った。

発射された弾は、全弾照準通りミサイルポッドに直撃する。片方は砕け散り、片方は

爆発しゴロゴロと地面に転がる。

クアドリガは、食べていた車を唾え上げ、真つ二つに砕き折り、ゆつくりとその凶体をヘラクレス部隊の方に向け、胸殻を開く。ミサイルポッドの攻撃手段を奪われたが、クアドリガにはまだ胸殻に格納されたミサイルを持っている。

《次弾装填！胸をぶち抜け!!》

クアドリガが胸殻のミサイルを点火した瞬間に、2回目の斉射が行われた。

6輻の砲火はクアドリガの胸殻、何発かはミサイル本体に直撃し、大きな爆発が起きる。爆発の黒煙で、クアドリガの姿が隠れるほど凄まじい爆発であった。

《まだだ！もつと叩き込んでやれ!!》

レノックスが興奮気味に通達する。

3度目の斉射。黒煙の中にいるクアドリガに当たっているのかはわからない。だが逃げられるわけがないとレノックスは砲撃を続けさせる。

4度目。5度目：撃ち込む度に黒煙は膨らみ、爆発音ばかりで当たっているのかすらわからなくなる。

レノックスは射撃をやめて暫く様子を見るが黒煙で全く見えない。

《司令部。クアドリガのオラクル反応は?》

無線機からオラクル反応の強度を解析する為のキーボードを叩く音が聞こえる。

《オラクル反応は20%。まだ活動状態です!》

オペレーターが報告を終えた、瞬間、黒煙から巨大な図体が飛び出す。被弾した箇所から黒煙を蒸し、前脚の付け根や首からは出火し、炎が図体の動きに比例し激しく揺れる。

その一步一步は地面を凹ませながら、周囲の小さな石や瓦礫を浮かせ、建造物の埃や小石を叩き落とす程で、着実にレノックス達の戦車へと突進してくる。

《撃て!!どこでも良い!!》

再び6つの砲口からバラバラに砲火が飛び出す。

それは、顔に、脚に、背中に…掠れる弾もあつた。

しかし、クアドリガの勢いは止まらない。

《合図するまで撃つのを止めるな!》

レノックスに焦りが見え始める。100m先にあつた目標が今では50m、40mと距離を縮めてくる。

7発目、8発目…それでもクアドリガは満身創痕の身体で突っ込んでくる。

「デカ物め…!」

レノックスが呟き、戦車から9発目の砲弾が放たれる。

その砲弾は、クアドリガの右前脚の履帯と履帯の関節部分に入り込んだ。直後に爆発

を起こし、クアドリガは姿勢を崩す。突進する勢いがそのままとなり、胴や顔が地面を擦れながら砂を上を滑る。クアドリガのボロボロの図体はヘラクレス部隊の眼の前で止まった。

《オラクル反応消失。クアドリガの活動休止を確認しました。任務ご苦労様です》
オペレーターの優しい声が各戦闘員が届く。

その直後に冷たい凍るような声で通知が入る。

《ご苦労だった。ルチア達の乗るヘリはミサイルを迎撃した》

「ふう…何とか倒せたな…ヘリも無事だし。戦果上々だなー」

レノックスはキューポラを開けて外の空気を吸う。

レノックスは眼の前に倒れているクアドリガの巨大な図体に恐怖を覚える。

以前はゴッドイーターの同伴があったとは、4斉射ほどで倒れたのに、と。

火を噴き、煙を吐きながらの突進…ヴァジュラを瞬殺した火力を何度も受け止めたその耐久性にも驚かされた。

今もクアドリガの死骸からは所々出火している箇所がある。その炎がクアドリガ自身が出した物なのか、ヘラクレス部隊が与えた傷なのかは誰にもわからなかった。

もしこれが俺達を踏み潰してたら…と思うとレノックスは掻いた冷や汗を裾で拭う。

レノックスは、戦車から降りて懐から何かを取り出す。それは手の平サイズの正四角

形の黒いキューブだった。

そのキューブはOAC（オラクル吸着キューブ）、ヘラクレス部隊はブラックボックスと呼んでいる。これは非神機使いである彼等が仕留めたアラガミのコアを回収する為に作られた装置であり、起動すると一箇所に針が出る。その針を死んだアラガミに刺し込むとオラクル繊維が根を張りコアを挽ぎ取る、という仕組みだ。

彼等には偏食因子が投与されていない為、防壁の強化などに必要なコアを回収できない。せつかく倒したアラガミの素材を無駄にするのも勿体無いので、とイギリス兵器開発局が開発した代物だ。

レノックスは、クアドリガに針を差し込み、捕喰が完了するのを待つ。暫くすると差し込んだ面の反対が黄色く輝く。

レノックスはブラックボックスを抜き、戦車に戻った。

だがそこで司令部から連絡が入る。

《悪い知らせだ。付近にコンゴウ2体が接近している。戦闘音を嗅ぎつけたのだからな》

「マジかよ……今日は突撃バカが多いな」

レノックスは落胆するが、司令部からの通信は、まだ続いた。

《良い知らせもある。新人ゴッドイーターを乗せたヘリが近くに來ている。だがミ

サイルの破片でテールローターがやられたらしく、高度を維持出来ないそうだ。お前達の所で拾って連れて帰れ」

はあ、と仕事が増えただけじゃねえかと思いいレノックスは溜息をつく。

《ヘリにはルチャ・ジュランナーも同乗している。彼女もコンゴウ討伐に参加させる。新人は神機がない為戦わせられない。そして彼を怪我をさせずに連れて帰れ、支部長命令だ》

了解、とレノックスは半ば適当に答えた。

「弾はあとどれくらいある？」

と、戦車兵に聞くと戦車兵は指で数えながら答える。

「1、2、3、4、5……クアドリガ3回分です。後は白煙弾、信号弾などが幾つかです」

「ハハッ、わかりやすい」

レノックスはそう言って、戦車に乗り込んだ。

第5話 討伐者

《レノックス、ルチア達の乗るヘリと周波数を合わせた。無線を使って連携しろ》
ゾーラ・スチュワートは、ヘリの座標とコンゴウの位置を司令部のモニターマップで確認する。

ヘリにはGPS、コンゴウ達アラガミには、オラクル反応を探知するレーダーで居場所を特定できていた。

《ヘリは南東から、コンゴウはそれぞれ北西から接近中だ。先にヘリが到着するだろう》

《了解した。あー、あー、新人を乗せたヘリへ、回収地点をチェックしたい。応答せよ》

レノックスがヘリの方向を見ると、青空に黒い点がポツンと遠くに見える。

テールローターから黒煙を吐きながら長い糸を作ってやって来る、レノックス達はそれが彼女達が乗るヘリだとすぐにわかった。

《はい。その声はレノックスだね！今そっちへ向かってるよ》

《司令部から聞いたかと思うがコンゴウが接近してる。時間はそう長くは取れない、

こっちは接敵次第交戦に入るから、お前らは砲撃に巻き込まれないように後ろから来てくれ」

《了かい》

ヘリはフラフラと揺れながら徐々に高度を下げてやってくる。高度も維持出来ないくらい被害が増大したのか、レノックスは不安と後ろめたさを感じた。

ーヘリ内部ー

「今からクアドリガを倒したヘラクレスの人達と合流するんだけど…あんたは戦えないから隠れててね」

ルチアが少しバカにしたようにジエレミーに忠告する。

「…分かった。このヘリは放棄するの？」

「そんな訳ないでしょ!? 廃墟の屋上に留めて、また後日修理班を連れて回収する、まったく…ヘリがどれだけ貴重かも分からないなんて…」

ルチアは、また心底バカにしたような素振りを見せる。

「…ぐぬぬ…」

仲が良いとは言え、ここで言い返せる訳もなく、ヘリは高度を下げ廃アパートの屋上に近づく。

操縦士がヘリを滞空させながら位置を調節する最中に通信が入る。

《司令部より、ヘラクレスとヘリへ。2体のコンゴウのうち1体が別の方向へ向かった。このまま放置するのも危険だ。両方倒せ》

通信が切れる頃には、ヘリは着陸していた。

ルチアとジェレミー、そして操縦士がヘリから降りる。

「今からレノックス達の所へ送るから、アラガミ見つけても素手で挑まないでね」

「挑むかよ…。レノックスってヘラクレスの隊長のことか？」

「こそ。わかったら、さっさと操縦士さんをおぶって、ここから飛び降りて」

そう言うルチアは屋上から飛び降りてジェレミー達の視界から消え失せる。

ゴッドイーターは一般人の数倍の衝撃は耐えられる。また、傷を負ってもある程度なら回復するし、身体能力が向上し、屋上から飛び降りようがガラスが突き刺さろうが大丈夫なのだ。もちろん限度はあるが。

ジェレミーは、操縦士を背負い朽ちて飛び降り禁止用のフェンスが倒れたところから飛び降りようと縁に立つ。

下を覗き込むと結構な高さに、操縦士は思わず動揺を隠せなかった。

ジェレミーは飛び降りたが大の大人を背負っているからか衝撃が思ったよりも強く尻餅をついてしまう。

「ダサッ！早く立ち上がって付いてきて！」

言い返す間も無くルチアは走り出した。

わ

ジェレミーと操縦士もそれについて行く。

ー

「レノックスー！」

ルチアが走りながら叫ぶ。キューポラから顔を出すレノックスは声ができる方を向いた。

「よおルチア、そいつが新人か？」

レノックスとジェレミーの目が合う。

「初めまして。本日付でドイツ支部から転属してきました、ジェレミー・ウォーカーです。よろしく願います！」

ジェレミーは走ってきた為か少し息を荒くしながら自己紹介をする。

「ヘラクレス部隊隊長レノックス・S・ヒューイットだ。…すまない、詳しい自己紹介は後にしよう、先に奴らをぶっ倒す！」

「はい…わかりました。俺たちはどうすれば？」

レノックスは薄ヒゲを手で撫でながら少し考える。

「うーん…そこに来てくれ。俺達もここで戦うから、お前達は戦車の後ろに来てくれ、近

「寄るなよ？ 轢き殺すのは趣味じゃ無いしな」

ジェレミーは了解の返事をする。ルチアが居ないことに気が付く。

「そう言えば、ルチアの奴どこに行っただんですか？」

「確かにいないな……」

レノックスとジェレミーが辺りを見回すがルチアの姿は無い。

「神機使いなら、方向転換したコンゴウの討伐行くから、レノックス隊長に伝えてて、と伝言が……」

他の戦車の搭乗員がルチアから預かった伝言を伝えた。

「なるほど……あつちはルチアに任せよう。一体に集中出来る」

《司令部よりヘラクレス部隊へ、コンゴウは予定通りそっちへ向かっている。会敵はおおよそ20秒後》

「了解！」

6輻の戦車の砲に弾が装填される。

《各車輻へ、狙いは何処でもいい。兎に角、殺せ》

レノックスはそう言って、ヘラクレスの新たな餌食を待つ。

――

キイイイン……!!

鼓膜を突き抜けるような鋭い爆発音が鳴り響く。

ルチアは、逸れたコンゴウを呼び寄せ、為に音響グレネードを地面で炸裂させた。遠くで地面を殴るような重たい足音が微かに聴こえる。

それは秒単位で徐々に大きくなって、近づいて来るのがわかる。

「ほんつと、アラガミってバカだなあ」

小声でそんな事を言っていると、ドス、ドス、ドス……とコンゴウが音の発信源にやってきた。丁度ピンポイントで音響グレネードが炸裂した場所だった。

しかし、コンゴウの視界にルチアはいない。

不思議そうに辺りをキョロキョロするコンゴウ。

一方、ルチアは壁に身を潜めていた。

「さてと……すぐにやっちゃおうよ」

ルチアは、地面を蹴る。ひびが入って凹むくらいの衝撃が地面に伝わる。ゴッドイーターのその卓越した身体能力が可能にするステップだ。

コンゴウは後ろから猛スピードで近づいてくる凶刃に気が付かない。

ルチアはステップの勢いのまま、軽く跳ぶ。

コンゴウの背中をそのショートブレードで突き刺し、一気に身体を捻って回転する。

ブレードは、アラガミの肉の抵抗を受け、深い所で勢いが止まる。そうすると、ルチ

アは捻った身体の勢いを利用して刃を抜き、そしてまた別の箇所を刺す。

その要領で、コンゴウの尻尾から頭まで一気に回転しながら刺し進んだ。

コンゴウを裂いた傷口から血が大量に噴き、服や顔に付着するがルチアは気にも止めない。

コンゴウの目の前で着地したルチアは、拳を振り上げる素振りを見せたコンゴウの額にブレードを突き刺す。

ブレードが肉で固定されると、そこを支点にジャンプをした。神機は握ったまま、ルチアの身体が宙を浮く。

そして銃形態に切り替え、裂けた額目掛けてガトリングを撃つ。コンゴウが煙に包まれても、まだ撃ち続けた。ルチアの軽い身体は、銃撃の反動で少しの間浮いたままだった。

オラクルが切れるまで撃ち尽くしたルチアは、空中で近接形態に切り替え、プレデターを作る。

そして重力で身体が落ちるのを利用して、神機を下方方向へやり、プレデターの大顎がコンゴウの背中を喰らう。

あまりの衝撃にコンゴウは、腹を地面に着けてダウンした。

コンゴウのオラクルを飲み込んだ神機は、腕輪を通じてルチアをバーストモードにす

る。

よつ、と言つてルチアはコンゴウの背中に乗った。呼吸をしている為か、背中が上下に動くのをバランスをとつて相殺する。

「まだ生きてるよね？ゴツドイーターって早いでしょ？いや、私が強いだけかなあ？」

コンゴウの顔を背中から見下ろす。

と、遠くからタタタンツ！という炸裂音が聞こえた。

「ヘラクレスの戦車の音かな？」

ルチアが聞こえた方をコンゴウの背中から背伸びして見てみるが、廃墟の曲がり角の先なのか何も見えなかった。

コンゴウはダウンしたまま背中のパイプから空気の吸引を始める。

スウウウウ…という微かなその音をルチアは聞き逃さず、さっきの捕喰で取得したアラガミバレットを少し跳んでから空中で撃ち放った。

アラガミバレットが命中すると、パイプの中でエアが暴発したのかコンゴウの意図せぬタイミングでパイプが爆発する。背中のパイプが結合崩壊を起こした。

アラガミバレットの反動でコンゴウから距離を取ったルチアは、神機を再び近接形態に戻し、戦闘ポーチから何かを取り出す。

「もうカタをつけるね。ちよつと疲れてきちゃった」

取り出したアイテムを地面に乱暴に置く、カチツと音がしてその周囲へ黄色いオラクルを放つ。

「ほらほら、ホールドトラップだよ、かかってきなさい」

ホールドトラップを挟んでコンゴウはルチアを睨み付ける。

一方ルチアはお尻ペンペンでコンゴウを挑発する。

コンゴウはルチア目掛けて走り出した。当然、ホールドトラップには目もくれない。いや見ても何かはわからないだろう。

勢いよく近づいてくるコンゴウに、ルチアは全く動じず、ホールドトラップの前でプレデターを発生させ、喰らう準備をしていた。

「いただきます!!」

コンゴウがホールドトラップを踏み、全身に痺れが回る。その瞬間にルチアは、プレデターを伸ばしてオラクルの肉を噛み千切る。肉を喰らった神機は、それを飲み込み、腕輪を通じてゴッドイーターを強化する。ルチアのバーストモードLv. 2が開放された。

「さあ行くよ!!」

動けなくなつたコンゴウをルチアはその刃で斬る。斬る。斬る。何度も。

血が噴いて顔に掛かりそうになると、ステップで回り込み別の箇所も斬り刻む。突き

刺し、引き裂き、捻じ込み、一瞬たりともその手は休まず、その刃は肉を断つ。

ショートブレードの軽快さとルチアの身体能力、そしてバーストモードの強化でかれこれ100回は斬りつけたであろう。

そうしてる間にホールドトラップの持続時間が切れる。

コンゴウはそのまま立つ力も失われ、崩れ落ち、その巨体の重量に砂煙が舞う。

「やつと力尽きた……久しぶりに激しく動きすぎたかな？」

ルチアは捕喰をして、コアを剥奪した。その後神機を払って、付着した血を弾く。

《2体のコンゴウの反応は消えた。ご苦労、帰投しろ。昼食後は面会だ》

「はい」

ルチアが返事をする。別の方向から大きなエンジン音が聴こえた。振り返るとヘラクレス部隊の戦車が一行で帰投するのが見えた。

そう言えば、とルチアは砲撃音は1度しかなかったのに、と思い返す。

6輜の戦車とは言え今まで全く対抗出来なかった兵器でヘラクレス部隊はコンゴウを瞬殺出来たのか、とその強さと技術の進歩を誇らしく感じざるを得なかった。

「ルチアー!!おーい!!」

ジェレミーが戦車の砲塔に座って、ルチアを呼ぶ。

ルチアは車列に走って、ジャンプして軽々とレノックスが乗る車輛の車体に乗った。

「お疲れさん、早いな。さすがゴッドイーターだ」

レノックスがそう言うのとルチアは胸を張る。

「いやーうちが強いからじゃない？」

ジェレミーがはいはい、と流す。

レノックスは微笑んだ。

「さーで、ミツシヨンは終了だ！帰って飯だ！飯！」

彼らは神に抗う者たちの戦いがこれから厳しさを増す事を知らない。